



『建礼門院右京大夫集』における平維盛の多屬性に着目して

人物像

著者	春原 志織
雑誌名	日本文芸論叢
号	26
ページ	17-30
発行年	2017-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00129854

『建礼門院右京大夫集』における平維盛

——人物像の多層性に着目して——

春 原 志 織

はじめに

『建礼門院右京大夫集』は、作者建礼門院右京大夫とともに生きた人々についての記憶に満ちている。それゆえ、この家集は日記としての性格を豊かに具えているのだが、記憶の多くが恋人の平資盛をはじめとする、滅亡した平家の人々にかかわる出来事である。もはやこの世で再び会うことのない人々についての記憶であるがゆえに、そこには深い喪失感、切実な悲嘆が認められる。しかし、『建礼門院右京大夫集』（以後『右京大夫集』と略記する）に見られるのは、このような悲しみを伴う記憶だけでない。明るさや晴れやかさ、軽やかさを感じさせる記述も少なくない。『右京大夫集』に記されている記憶は実にさまざまで、それらは互いに矛盾することなく、対立することなく、緩やかに連関し合い、重なり合っている。そうした記憶の多層性が『右京大夫集』の表現の特質であり、魅力となっている。『右京大夫集』とは、作者右京

大夫にとって忘れ難い記憶の多層的な集積の総和である。その多層性の実態を捉え出すことは、この作品の特質を明らかにすることには外ならない。

本稿は、そのような問題意識に立ち、『右京大夫集』における平維盛をめぐる記述に着目する。維盛は右京大夫が愛した資盛の兄で『右京大夫集』では、実名のほかに、「権亮」「少将」「三位中将」「わが物申す人のこのかみなりし」、「を」とこ」などと呼称を変えて、十の場面に登場する。その登場の多さについては、資盛の近親者であることがかわっているとの指摘もなされているが、維盛の記述はそれ以外の重要な意味も含んでいる。呼称の多様さにも現れているように、『右京大夫集』の中で維盛は、ある時は手の届かない憧れの存在として、またある時は、戯れることのできる親しい存在として登場している。こうした表現の姿勢の変移が、『右京大夫集』における平維盛の描かれ方の特徴であるとともに、『右京

大夫集』の記述の特質をも示している。『右京大夫集』の維盛の描かれ方の多層性を明らかにすることは、作品全体の記述の内実を明らかにするための重要な端緒になる。このような展望と問題意識に立って、『右京大夫集』における平維盛をめぐる記述場面を、これから詳しく検討して行く。

一 維盛の最初の登場場面

〈A〉

おなじ人の、四月御生の頃、藤壺に参りて物語せしをり、権亮維盛の通りしを呼びとめて、「このほどに、いづくにてまれ、心とけて遊ばむと思ふを、かならず申さむ」などいひ契りて、少将はとく立たれにしが、少し立ちのきて見やらるるほどに立たれたりし、二藍の色濃き直衣、指貫、若楓の衣、その頃の単衣、つねのことなれど、色ことに見えて、警固の姿、まことに絵物語いひたてたるやうにうつくしく見えしを、中将、「あれがやうなる身さまと身と思はば、いかに命も惜しくて、なかなかよしなからむ」などいひて、

6 うらやまし見と見る人のいかばかりなべてあふひを心かくらむ

「ただ今の御心のうちも、さぞあらむかし」といはるれば、物のほしに書きてさし出づ。

7 なかなかに花の姿はよそに見てあふひとまではかけじと思ふ

といひたれば、「おぼしめし放つしも、深き方にて、心清くやある」と笑はれしも、さること、をかしくぞありし。

これは、維盛が『右京大夫集』において最初に登場する場面である。四月の賀茂の御生の祭の頃、藤壺で右京大夫と藤原実宗（おなじ人）、「中将」が話をしていた折に、通りかかった維盛を実宗が呼び止め、近日遊楽をとにもすることを約束し、その後、遠ざかり、離れて立つ維盛の容姿について、右京大夫と実宗が語り合い、歌の贈答をしている。

ここですまず、中宮徳子の御所、藤壺にいた実宗と右京大夫の側近くに来た時の維盛は「権亮維盛」と称される。権亮とは、中宮徳子を支える中宮職しきの次官、亮ごんかんの権官である。その職にある維盛が藤壺を訪れるのは当然のことであり、中宮付き女房である右京大夫がそこで維盛を見るのは珍しいことではなかったはずである。主を同じくする維盛と右京大夫は同僚とも言い得る関係であったと考えられる。これは、資盛と右京大夫との間には見出せない関係である。『右京大夫集』の、維盛に対する「権亮」という呼称には、連帯感や親しみ、さらには身内意識もうかがわれる。

ところが、この日の維盛は普段とは異なっていた。中宮権亮のほかに、右近衛権少将を兼官していた維盛は、賀茂の御生の祭での近衛司としての晴れの装束、「警固の姿」の出で立ちであった。右京大夫は、「少将はとく立たれにしが」と、その晴れの姿を描き出すところから、維盛の呼称を「権亮」から「少将」に切り替える。そして、「その頃の単衣、つねのことなれど」と、直衣姿自体は特

別珍しいものではなく、普段どおりであったとしつつも、装束の色彩が格別で、絵物語の登場人物さながらの美しさであったと維盛の容姿を絶讃している。

この場面で、維盛が「少し立ちのきて見やらるるほどに立」った時に、その美しい「警固の姿」が捉えられたというのは、右京大夫のいたほの暗い場所から、外光の差し入る明るみに立つ維盛の姿がよく見えた、ということであらうか。内なる藤壺の中にいた維盛は身内として「権亮」と呼ばれ、晴儀における近衛司としての正装で出で立つ、外なる維盛は「少将」と称されている。

その晴れの日の維盛の美しい姿を見やって、実宗は、右京大夫に「あれほどの美しい身を持ち、それを自覚したならば、どうにも命が惜しまれて、かえって不都合なことになるのだらう」と維盛の度を越した美しさをうらやむべきではないものと語りつつ、その後の詠歌では初句から「うらやまし」と、維盛の美しさをうらやんで、「維盛を見た女性是谁もみな恋人として逢う日をどんなに心にかけて願っていることか」と詠み、また、「今のあなたの心の中の思いもそうでしょうね」と語りかけている。実宗のこうした歌と語りかけをうけ、右京大夫は、「いっそのこと、花のように美しい姿は遠く離れたところから見ることにして、恋人として逢おうとまでは願うまいと思う」と、実宗の問いをはぐらかす返歌をしている。しかし、実宗から「そのようにことさらに逢うまいと思うのは、かえって心深く思っているからで、恋心が無いというのは本心ではありませんね」と笑われ、切り返されているように、その返歌は、維盛に対する深い憧れを表すものとなっている。そ

もそも、右京大夫は、歌に「花の姿」と詠んで、維盛の美しさへの憧れを隠しておらず、このように内心を言い当てられたことに對しても、確かにその通りだと納得し、おもしろがっている。右京大夫と実宗との和歌の贈答と語り合いは、互いに本心を隠すふりをしながら露わにするという興趣に富んだ内容である。そこで話題になることで、維盛の美しさは印象深く強調されている。

以上のように、維盛の最初の登場場面で、右京大夫は、同じ主、中宮徳子とともに仕える維盛を「権亮」と呼んで身内意識を示す一方で、近衛司としての「花の姿」の維盛を「少将」と称して、異性と意識した憧れの思いを表している。『右京大夫集』に込められた作者の記憶は、同じ場面の中であっても、このような心の変移を映して多層化している。

二 近衛司としての維盛

平治元年（一一五九）の生まれと考えられる維盛は、嘉応二年（一一七〇）十二月に十二歳で右近衛権少将に任ぜられて以降、寿永二年（一一八三）七月の出京まで約十三年間、近衛司であり続けた。治承五年（一一八二）六月には右近衛権中将となり、同年（養和に改元後）十二月に従三位に叙せられ、『平家物語』ではこの後、寿永三年三月に入水する時まで「小松の三位中将」と称されている。維盛が近衛司であったのは、中宮権亮になる承安二年（一一七二）よりも前からであり、その期間中は中宮職に仕えるよりも長く、『右京大夫集』で維盛は近衛司として幾度も登場する。次に挙げるのも、その場面の一つである。

〔B〕

近衛殿、二位中将と申しし頃、隆房、重衡、維盛、資盛などの殿上人なりし、引き具せさせ給ひて、白河殿の女房たちさそひて、所々の花御覧じけるとて、又の日、花の枝のなべてならぬを、花見ける人々の中よりとて、中宮の御方へ参らせられたりしかば

9 さそはれぬ憂さも忘れてひと枝の花にそみつる雲のうへ人

返事

隆房の少将

10 雲のうへに色そへよとて一枝を折りつる花のかひもあるかな

資盛の少将

11 もろともに尋ねてをみよ一枝の花に心のげにもうつらば

ここには、二位中将であつた近衛殿（藤原基通）が、藤原隆房、平重衡、維盛、資盛ら殿上人を引き連れ、白河殿（徳子の妹盛子、基通の父、基実の妻）に仕える女房たちを誘つて諸所で花見をし、後日、中宮徳子のもとにこの殿上人たちから美しい桜の花の枝が贈られ、その返礼の歌を右京大夫が詠み、隆房と資盛からのそれに対する返歌があつたという、一連の経緯が語られている。二位中将基通に加え、この時、隆房、重衡、維盛は少将であり、資盛も和歌の詠者として、「隆房の少将」に並んで「資盛の少将」と呼ばれているように、若い近衛司たちの華やかな遊樂が、颯爽とした雰囲氣を伴つて描き出されている。そこには中宮徳子に仕える、内なる女房である右京大夫からの、外なる世界の近衛司の殿上人

たちへの憧れの思いもうかがわれる。この時、既に中宮権亮を兼ねていた維盛も右京大夫の身内としてではなく、晴れやかな外なる世界の近衛司の殿上人として登場している。

また、次の場面では、維盛は明確に「少将」と称されている。

〔C〕

となりに庭火の笛の音するにも、としどし、内侍所の御神楽に、維盛の少将、泰通の中将などのおもしろかりし音ども、まづ思ひ出でらる。

127 きくからにいとむかしの恋しくて庭火の笛の音にぞ泣くなる

この〔C〕は、右京大夫が宮仕えを退いた後のこと、隣家からの神楽の「庭火」の曲の笛の音を聞いて、十二月の宮中行事の内侍所御神楽のみごとな笛の音を思い出し、宮仕えの日々への恋しさを募らせ、歌を詠む場面である。ここで思い出され、名の挙がるすぐれた笛の奏者が、「維盛の少将」と「泰通の中将」である。藤原泰通と並ぶ笛の名手として、その「おもしろかりし音」が想起される維盛は、「権亮」ではなく、「少将」と呼ばれ、晴儀である神楽での奏を務める近衛司として意識されている。中将の任（承安四年（一一七四）十二月に右近衛権中将に任ぜられ、翌年一月に左近衛中将に転ずる）にあつた泰通よりも、十歳以上の年下であつたとおぼしき少将、維盛の名が先に挙がるところにも、右京大夫による維盛の笛の能芸に対する格別の讃美がうかがわれる。この〔C〕は、右京大夫が維盛を格式ある外なる晴れの舞台で拔群の能

芸を發揮する近衛司と捉えていたことを伝える記述である。

なお、〈A〉の場面で、その類まれな容姿を絶讃されていた維盛も〈B〉〈C〉においてはその美しさがことさらに特筆されることなく、近衛司の殿上人の一人として遇されている。ここにも、『右京大夫集』の記述の、複数の記憶を単一のイメージに固定せずに重層化させる性格がうかがわれる。また、〈A〉〈B〉〈C〉の他にも、右京大夫は、90番歌の詞書で、「三位中将維盛の上のもとより」と、この時の和歌の贈答の相手で、親交のあった、維盛の北の方を紹介するに際して、近衛司としての維盛の職と位に言及している。ここでの関心は北の方に向けられており、維盛は北の方の夫として意識されるにとどまっている。さらに、後述するように、維盛の死を語る重要な場面で、右京大夫は維盛を「三位中将」と呼んでいる。維盛と同じく近衛司として意識する時にも、右京大夫の関心のあり方は実に多様である。

三 中宮権亮としての維盛

次に、先の〈A〉以外で、維盛が中宮権亮と意識されている場面に注目する。

〈D〉

故建春門院の御ために、御手づから御經書かせおはしまして、内裏にて御八講おこなはれし五巻の日、女院たち、後の宮々、三条の女御殿、白河殿など、みな御捧物たてまつらせ給ひし。そなたに縁ある殿上人、持ちてまゐり

しけしき、おもしろくもあはれにもありしに、中宮の御捧物は、二枝を、宮亮みやろう権亮けんりやうなど持たれたりしとおぼゆ。故女院、いらせ給ひておはしましし方をとりはらひて、道場にしつらはれたりし、あはれにて、

8 九重に御法の花のにほふけふきえにし露もひかりそふらむ

ここには、宮中で執り行われた亡き建春門院の御八講の盛大な様子が描かれている。その盛大な法会の中で、右京大夫が「おもしろくもあはれにもありし」格別のこととして想起しているのが、「女院たち、後の宮々、三条の女御殿、白河殿」にそれぞれ縁のある殿上人たちが御捧物を供える様子であった。右京大夫は中宮徳子に仕える身として、特に中宮の御捧物に注目するのだが、それを持って現れたのは、中宮職の亮の重衡と、権亮の維盛であったと記憶している。その後右京大夫は、かつての建春門院の居所が道場として整然と改められていることに深く感動し、この晴れやかな法会によって、亡き建春門院がすばらしい仏果を得るであろうことを讃美する歌をとどめている。

この記述の主眼は、亡き建春門院のための華やかな法会を語ることにあり、維盛もこの法会に奉仕した多くの人々の中の一人ではあるが、中宮の捧物を持つ大役を担った維盛を「権亮」と特筆しているところに、同じ主に仕える身内意識を抱きつつ、特別視する眼差しがうかがわれる。正官の亮重衡、権官の亮維盛の順に記すのは、中宮職の職階にもとづくもので、この場面の記述としては当然のことと言えよう。

同様の身内意識にもとづく眼差しは、次の場面の記述にも現れている。

〔E〕

春頃、宮の西八条に出でさせ給へりしほど、大方にまゐる人はさることにて、御はらから、御甥たちなど、みな番にをりて、二、三人はたえずさぶらはれしに、花のさかりに月明かりし夜を、「ただにやあかさむ」とて、権亮朗詠し、笛吹き、経正琵琶ひき、御簾のうちに琴かきあはせなど、おもしろくあそびしほどに、内より隆房の少将の、御文もちてまゐりたりしを、やがてよびて、さまざまのことどもつくして、のちにはむかし今の物語りなどして、あけがたまでながめしに、花は散り散らずおなじにほひに、月もひとつにかすみあひつつ、やうやうしらむ山ぎは、いつといひながら、いふかたなくおもしろかりしを、御返し給はりて、隆房出でしに、「ただにやは」とて、扇のはしを折りて、書きてとらず。

95 かくまでのなさけつくさでおほかたに花と月とをただ見まじに

96 少将、かたはらいたきまで詠じ誦じて、すずりこひて、「この座なる人々、なにとみな書け」とて、わが扇に書く。かたがたに忘るまじきこよひをばたれも心にとどめてを思へ

権亮は、「歌もえよまぬ者はいかに」といはれしを、なほせめられて、

97 心とむな思ひでそといはむだにこよひをいかがやすく忘れむ

98 うれしくもこよひの友の数にいりてしのばれしのぶつまとなるべき
経正の朝臣

と申ししを、「われしも、わきてしのばるべきことと心やりたる」など、この人々の笑はれしかば、「いつかはさし申したる」と陳ぜしをかしかりき。

これは中宮が父平清盛の邸、西八条殿に里下がりした際に開かれた宴の記述である。右京大夫は中宮付きの女房として西八条殿に同行し、維盛も中宮の甥であり中宮権亮であるという立場から中宮の側に仕えていた時、折からの満開の桜と明月に興を催されて開かれたのがこの宴である。維盛が朗詠と笛の、経正が琵琶のすぐれた能芸を披露し、それに合わせて女房たちも琴を奏し、「おもしろくあそ」ぶこととなった。そこに、内裏から中宮への文を届けに來た藤原隆房も加わって、興趣溢れる宴は夜明けまで続くのだが、隆房が中宮から文を受け取り退出しようとしたところで、右京大夫がそれを引き留め、95番歌を詠む。この右京大夫による詠歌が契機となり、隆房、維盛、経正が順に歌を詠み、さらに忘れがたい遊樂の場となった。

この宴の場面において、維盛は朗詠と笛に秀でていたことが特筆されているが、「権亮」と称され、身内意識とそれに基づく気安さをもつて捉えられていることも看過できない。維盛は右近衛権少将を兼任しているが、この場面で「少将」と呼ばれているのは、高倉天皇から中宮徳子への文を持って来た隆房である。それに対し、同じく中宮に仕える身内と右京大夫から意識されている維盛については、その気安さからか、「歌が不得手なものはどうしたらよいのか」と詠歌をためらい、周囲の人々に「せめられて」、なんとか和歌を披露するという滑稽な様子が描かれている。如才なく振る舞う「少将」隆房とは対照的である。維盛は経正とともに、その能芸によって宴を華やがせる人物として特筆されているが、その一方で、身内意識から「権亮」と称され、戯れやからかいの的となる人物としても描かれている。

〈D〉〈E〉の場面から、維盛が儀式・遊楽の重要人物として注目される一方で、身内意識を持って親しまれていたことがわかる。これらの記述には右京大夫の憧れも込められているのだろうが、それに加え、親しみがうかがわれる。なお、〈A〉〈D〉〈E〉の他に、右京大夫は、85番歌の詞書で、「成親の大納言の女君の、権亮維盛の上なりし人」と、和歌の贈答の相手である維盛の北の方を紹介するに際して、「権亮維盛」と述べている。先述の90番歌の詞書と同様に、ここでの右京大夫の関心は北の方に向けられているが、90番歌の詞書で、北の方を「三位中将維盛の上」と呼んでいるのが、ここで「成親の大納言の女君の、権亮維盛の上なりし人」と称している理由は判然としない。85・86番歌にかかわる出来事が藤原

成親が配所で殺害される安元三年（一一七七）の鹿の谷事件と分かちがたく結びつくものとして記憶され、その時の記憶による何らかの連想から維盛が「権亮」として意識されたのであろうか。

四 私的な和歌の贈答における維盛

維盛を権亮と呼ぶ際の親しみが昂ずるような形で、右京大夫が維盛を「をとこ」と称する場面もある。

〈F〉

上臈だちて近くさぶらひし人の、とりわき仲よきやうなりしに、わが物申す人のこのかみなりしは、御ゆかりのうへに、やがて宮人にて、ことにつねにさぶらひし人のびて心かはして、かたみに思ひ合はぬにしもあらじと見えしかど、世のならひにて、女がたは物思はしげなりしを、まほならねど心得たりしかば、ちと、けしき知らせまほしくて、をとこのもとへつかはす。

187 よそにても契りあはれに見る人をつらき目見せばいかに憂からむ

188 たちかへるなごりこそとはいはずとも枕もいかに君を待つらむ

189 おきてゆく人のなごりやをし明けの月かげしろし道芝の露

返し、「あいなのさかしらや。さるは、かやうのこともつ

きなき身には、言葉もなきを」とて、

190 わが思ひ人のころをおしはかりなにとさまざま君なげくらむ

191 枕にも人にもころ思ひつけてなごりよなにと君ぞいひなす

192 あげがたの月をたもとにやどしつかへさの袖は我ぞ露けき

ここでの右京大夫の三首の贈歌には相手に対する非難が現れており、三首の返歌にはそれに対する反論が示されている。この六首の和歌の贈答には、『右京大夫集』の中の他の贈答歌群にはない、右京大夫による相手への非難が見られる点で特異なものとなっている。『右京大夫集』における贈答歌は全部で三十五組百十一首あり、その大半が一首ずつの贈答である中で、六組四十四首の贈答では（一組返歌を載せていないものもある）、右京大夫が一度に複数の歌を贈っているが、その贈歌のほとんどが相手の心中を思いやる内容となっている。それだけに、〈F〉の場面の非難を込めた三首の贈歌は特異な印象を与える。

「わが物申す人のこのかみなりしは、御ゆかりのうへに、やがて宮人にて、ことにつねにさぶらひし人」とあることから、歌を贈った相手が維盛であることは明らかである。しかし、維盛を〈A〉〈E〉のように「権亮」、「少将」とは呼んでいない。〈F〉では、右京大夫が思いを寄せている人、すなわち資盛の兄として登場し、その中で維盛は「をとこ」と称されている。右京大夫は、中宮徳子に仕える女房のなかでとりわけ仲のよい「上臈」だつ人が、

維盛との恋愛に苦しんでいることを、その「をとこ」維盛に伝えようと三首の歌を詠んでいる。そこには世間一般の男と女の恋愛関係から、男は女を思い悩ませるものなのであるという意識がうかがえる。また、『右京大夫集』には、資盛との恋愛に思い悩み苦しんでいたことが幾度も語られるが、右京大夫は相手の女の苦しみを知らないであろう維盛と女性との関係に、資盛と自身の関係を重ね合わせていたとも考えられる。維盛は中宮の「ゆかり」で、世に時めく平家の公達であり、相手の女性も「上臈」だつ女房であることから、この男女は、いずれも右京大夫よりも身分が高いもの同士となるが、この二人の恋愛にあえて立ち入って、維盛の不実を非難しているのには、こうした女の立場への強い思い入れがあったと言つてよいだろう。

それにしても、右京大夫の贈歌における維盛への非難は通常では考えられない異例のものである。こうした異例の贈歌が成り立つには、文字通りの非難とともに、維盛をからかい試す戯れの意図もあったのではないだろうか。右京大夫の詠歌に、非難の意図があることは確かだが、非難の言葉の奥底に、維盛ならばそれが許されるという気安さや親愛の情が働いているように思われる。「御ゆかりのうへに、やがて宮人にて」と述べられてもいるように、この贈歌が生まれるところには、維盛を「権亮」と呼ぶときの身内意識とともに、愛する資盛の兄であるという別の身内意識が働いていたと考えられる。それは甘えであり、からかいでもある。右京大夫の贈歌に対する返歌をする前に、維盛は、「かやうのこともつきなき身には、言葉もなきを」と述べている。この言葉は先述の

《E》の場面での維盛の発言「歌もえよまぬ者はいかに」と類似し

ており、また同様の滑稽さを含んでいる。右京大夫は、和歌を苦手とする維盛が対応に窮することも見越して、あえて一度に三首もの歌を贈ったのではないか。親愛の情によるからかいと戯れがうかがわれるところである。

一方、維盛も「あいなさかしらや」と、右京大夫の言動をうるさがりつつも、右京大夫の異例の非難や甘えを許容していると考えられる。さらに維盛は右京大夫の贈歌に対し、反論を試みる中で、正当な返歌となるよう意識しており、191番歌、192番歌では、贈歌の188番歌の要句「枕」「なごり」、189番歌の要句「月」「露」をそれぞれに織り込んだ返歌を詠んでいる。苦手の詠歌に苦勞しながらも、しかるべく対応しようと努めていることがわかる。躍起になって反論していることは確かだが、維盛の側にも右京大夫に対する親愛の情や身内意識があつて、からかいと戯れに付き合つてやろうとしていると考えられる。

先述の《D》《E》の場面でも、維盛は「権亮」と称され、親愛の情や身内意識が感じられたが、この《F》では通常であれば憚られるような非難や、からかい、たわむれが許容される「を」として登場している。ここでの維盛は《A》《E》までの近衛司や権亮として、儀式、遊宴で活躍する維盛ではない。《F》は恋愛という私的な問題への介入、私的な和歌の贈答が行われている点でも、看過できない記述となっている。

五 死の報に接した時に想起される維盛

これまで《A》《F》までの記述で見てきたように、『右京大夫集』の維盛は、その場その場に応じて、多層的に描き出されている。そうした維盛をめぐる記述の多層性は、維盛の死が語られる決定的な場面にも現れている。

《G》

また、維盛の三位中将、熊野にて身を投げてとて、人のいひあはれがりし。いづれも、今の世を見聞くにも、げにすぐれたりしなど、思ひ出でらるるあたりなれど、きはことにありがたかりしかたち用意、まことにむかし今見る中に、ためしもなかりしぞかし。さればをりをりは、めでぬ人やはありし。法住寺殿の御賀に、青海波舞ひてのをりなどは、「光源氏のためしも思ひ出でらるる」などこそ、人々いひしか。「花のにはひもげにけおされぬべく」など、聞えしぞかし。そのおもかげはさることにて、見馴れしあはれ、いづれかといひながら、なほことにおぼゆ。「おなじことと思へ」と、をりをりはいはれしを、「さこそ」といらへしかば、「されど、さやはある」といはれしことなど、かずかずかなしともいふばかりなし。春の花の色によそへしおもかげのむなしき波のしたにくちぬるかなしくもかかるうきめをみ熊野の浦わの波に身をしづめける

216

215

維盛の訃報が届き、人々が悲しむ中、右京大夫は維盛の容貌や心配りが類なくすぐれていたことを想起し、中でも、人々が「光源氏のためしと思ひ出でらるる」と絶讃した、法住寺殿での後白河院の五十の御賀における青海波を舞う姿を特筆している。この御賀が催された安元二年（一一七六）三月には、維盛は右近衛権少将であるが、〈G〉では、寿永三年（一一八四）の維盛の入水の報を受けた時の認識にもとづき、維盛の極位極官が従三位右近衛権中将であったことから、「三位中将」の称を通してゐる。また、それに加え、近衛司として青海波を舞った維盛を「少将」とせず「中将」としているのには、『源氏物語』紅葉賀巻で青海波をみごとに舞った光源氏が、「源氏の中将」と称されていることも深く関与していると考えられる。既に多くの先行研究が指摘している通り、〈G〉の場面には、「きはことにありがたかりしかたち用意」、「光源氏のためしと思ひ出でらるる」、「花のほひもげにけおされぬべく」といった、『源氏物語』紅葉賀巻を踏まえた表現が見られ、維盛の美しさが褒め讃えられているが、ここでの中将という呼称も『源氏物語』にかかわるものである。中将という維盛の官職の記載にも、光源氏のイメージを重ねる意図があると考えられる。晴れの舞台で青海波を美しく舞い、人々から光源氏にもなぞらえられて絶讃された時の維盛は、その姿を一観衆として見た右京大夫からすれば、手の届かない憧れの存在であつたはずである。

だが、〈G〉に描かれるのは、そうした憧れの対象としての維盛だけではない。たわいもない会話を交わす、ごく身近な相手としても想起されている。維盛は「おなじことと思へ」と右京大夫に

語り掛けたという。「おなじことと思へ」とは、弟の資盛のことを踏まえて「弟を愛しく思うように、私のことも同じように思つてくれ」という意味合いだろう。もちろん、どこまで本気かわからない口説き文句であるが、それを承知で右京大夫も「さこそ」と、その通り維盛を大切に思っていることを告げる、社交辞令とも本心ともつかぬ返答をしている。それに対し、維盛は「されど、さやはある」と右京大夫の発言をその真意を探るように否定してみせる。この戯れには、右京大夫と維盛の双方が互いに抱く親愛の情や身内意識がうかがえる。甘えを互いに許容し合える信頼関係が成り立っていたと言つてよいだろう。しかも、そのようなことが「をりをり」あつたというのだ。

維盛の訃報を聞き、維盛の不在に直面した右京大夫の脳裏には、〈A〉～〈F〉の出来事をはじめさまざまな維盛の記憶が浮かんだと考えられるが、〈G〉で語られるのは、この二つの記憶であった。数多くの維盛の記憶の中でも、光源氏さながらに最も晴れやかで美しく、手の届かない存在と意識された時の記憶と、最も身近で親しい相手と意識された時の記憶とが、ともに強く思い出され、語られている。この一見両極端とも言える記憶を想起する中で、右京大夫にとってかけがえのない人であつた維盛の死が悼まれ、悲しまれている。〈G〉の記述にはそうした死別によつても失われてはならない、ありし日の維盛の姿と振る舞いと言葉が、確かなものとして書きとどめられている。

なお、〈G〉が『右京大夫集』に維盛が登場する実質的な最終場面となるが、この直後の217・218番歌の詞書には、「ことにおなじゆ

かりは、思ひとるかたの強かりける。憂きことはさなれども、この三位中将、清経の中将と、心とかくなりぬるなど、さまざま人のいひ扱ふにも、『残りていかに心弱くや、いとどおぼゆらむ』など、さまざま思へど（後略）と、兄弟の維盛、清経に先立たれた資盛の心痛を案ずる中で、〈G〉に続いて、維盛を「三位中将」と称する記述が見られる。この記述が、『右京大夫集』における維盛への言及の最後となる。

おわりに

本稿では『右京大夫集』における維盛の描かれ方の多層性を明らかにするという目的のもと、維盛が登場する場面の記述を考察してきた。『右京大夫集』の維盛は、その時々「少将」とも「権亮」とも「を」とも呼称を変えて、言動や、姿、動静が語られている。『右京大夫集』における維盛は、憧れの人でもあり、主と同じくする身内でもあり、恋人の兄でもあり、恋人にもなりうる異性でもあり、賞讃の的にも、親しみ合う相手にも、からかいの対象にもなる存在であった。こうした場面場面で変容する維盛は、いずれも右京大夫の記憶の中の真の姿であったと考えられる。こうした多層的な記憶の総和が、『右京大夫集』の平維盛である。その魅力ある多層的な人物像は『右京大夫集』ならではのものと言っ

てよいだろう。

右京大夫が長い年月を経る中で、維盛をめぐる記述を改筆したとも考えられるが、〈G〉以外の〈A〉〈F〉には、後に維盛が非業の最期を遂げることを示す記述は見当たらない。同じ維盛に

ついて語っているとは言っても、これらの場面は個々に独立している。だが一方で、維盛の容姿の美しさが賞讃される場面や、維盛が歌を不得意とすることに言及する場面が複数見られるなど、場面の違いを超えたモチーフの緩やかなつながりも見出される。これらの場面一つ一つが、その時々抱いた感慨や感情を語り出していると同時に、右京大夫から見た維盛の真の姿を捉え得ており、『右京大夫集』における平維盛の人物像を多層的に語り出している。そこに、和歌とその詞書を柱とした場面ごとの独立性を保ちつつ、場面間の連続性、相関性を見えた『右京大夫集』の特質が顕著に浮かび上がる。

『右京大夫集』における多層性の問題は、維盛一人のみに留まるものではない。『右京大夫集』に登場する多くの人物やモチーフが多層性を持つと考えられる。もちろん、その多層性の内実は人物、モチーフごとに異なるはずだ。そうしたさまざまな多層性の総和としての『右京大夫集』をこのたびの考察を基点としてさらに幅広く多角的に考えていきたい。

注

(1) 執筆者の調査による。本稿では、全十場面のうちの七場面〈A〉〈G〉に特に注目して論述を進めるが、残り三場面の、85番歌詞書、90番歌詞書、217・218番歌詞書については、本論の中で適宜言及することとした。

(2) 辻勝美・野沢拓夫、中世日記紀行全評釈集成第一巻『建礼

門院右京大夫集』(勉誠出版、二〇〇四年十二月)において、野沢氏は187〜192番歌について、このあとに続く歌との連関に着目し、「この記事と前後の記事を結ぶ連想要素として「ゆかり」を想定したが、作者にとって資盛の近親について記すのは、資盛について記すのと同様な意味合いをもっているようにも思う」と述べている(九四頁)。

(3) 『右京大夫集』の本文は、糸賀きみ江全訳注『建礼門院右京大夫集』(講談社学術文庫、二〇〇九年一〇月)に拠る。本文の引用の際に記す、歌番号も本書に従う。なお、特に断りのない限り、引用本文に付す傍線、記号などは、引用者によるものである。

(4) 中宮職の官人と中宮に仕える女房との間に、同じ主に仕える者同士に連帯感や親しみが見出されることについては、小澤恵里奈『「枕草子」六段「大進生昌が家に」における中宮定子像」——「宮司」と女房の交流に介入する后——』(『日本文芸論稿』第三八・三九合併号、二〇一六年三月)が示唆に富む論述を行っている。小澤氏は『「枕草子」第六段における清少納言と中宮大進平生昌の關係に、「同じ主の下で、身近に仕事を行う者同士としての連帯感や親しみやすさ」を認めているが、『右京大夫集』に描かれる中宮徳子周辺においても、同様の連帯感があったと考えられる。それは、「権亮」という呼称と、それに伴って現れる親しみの感情や「身内意識」に見出すことができる。

(5) 維盛の生年については、『平家物語大事典』(東京書籍、

二〇一〇年十一月)の「平維盛」の項(担当は日下力氏)の考証に従い、官歴については、新訂増補国史大系53『公卿補任 第一篇』(吉川弘文館、一九六四年七月)および、市川久編『近衛府補任第二』(続群書類従完成会、一九九三年七月)に拠る。

(6) 右京大夫が中宮に仕える身であったと考えられる時期(治承二年「一一七八」の秋ごろまで)と、資盛が少将であった時期(治承二年二月以後、右近衛権少将)、藤原基通が二位の中将であった時期(安元二年「一一七六」三月から治承三年一月)は重ならず(資盛と基通の官歴は、注(5)の新訂増補国史大系『公卿補任 第一篇』に拠る)、「資盛の少将」という記述は事実在即していない。弓削繁『建礼門院右京大夫集』小考——11番歌の意味するもの——(『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第四二巻第二号、一九九四年三月)は、この点に注目し、「ここには何らかの積極的な意図が読み取られるべきではなからうか」と捉えた上で、「資盛を『少将』とするのは、隆房のことを意識しての多分に恋物語的な志向が働いているからではあるまいか」、「確かに右京大夫は眼前の隆房の姿を通して、今は亡き資盛の輝かしい現在を幻視していたものと思しく」と指摘している。右京大夫が、平家没落後も昇進を続けた藤原隆房の姿に、資盛の今を幻視したかどうかについては、さらなる検討を要すると考えるが、(B)が、二位中将藤原基通たち近衛司の華やかな遊樂を語る場面であることも考え合わせると、

弓削氏が指摘するとおり、右京大夫がここで資盛を「少将」と称したところに、自身と資盛との関係を理想化する「積極的な意図」があったと見ることは十分に可能であると思う。

(7) 藤原泰通の官途については、注(5)の、新訂増補国史大系『公卿補任 第一篇』、『近衛府補任 第二』を参照した。

(8) この六組四十四首とは、右京大夫と維盛との贈答を除くと、103ゝ106番歌の贈答(平重盛が亡くなった際に重盛の北の方に對して贈った弔問歌二首とその返歌二首)、107ゝ110番歌の贈答(藤原成親が流罪にされた際に贈った北の方の後白河院京極を慰める歌二首とその返歌二首)、175ゝ184番歌(右京大夫が里に下がっている仲の良い女房に對し贈った歌で、返歌は記されていない)、217ゝ222番歌(戦地にいる資盛との生前最後の贈答六首) 335ゝ348番歌(平親宗が亡くなった際に息子の親長へ贈った歌六首、親長の返歌八首)が、それに該当する。

(9) 次のような詠歌、詞書等に、資盛とのままならぬ恋に悩む思いが現れている。

なにとなく見聞くごとに心うちやりて過ぐしつ、
なべて人のやうにはあらじと思ひしを、朝夕、女
どちらのやうにまじりあて、みかはす人あまたあり
し中に、とりわきてとかくいひしを、あるまじき
ことやと、人のことを見聞きても思ひしかど、契
りとかやはのがれがたくて、思ひのほかに物思ふ

はしきことそひて、さまざま思ひみだれし頃、里
にてはるかに西の方をながめやる、こずゑは夕日
のいろしづみてあはれるに、またかきくらしし
ぐるるを見るにも、

61 夕日うつるこずゑの色のしぐるるに心もやがてかきく
らすかな

(10) 右京大夫がここで典拠にしたと考えられる『源氏物語』紅葉賀巻の記述は次のとおりである(引用は、新編日本古典文学全集20、阿部秋生ほか校注・訳『源氏物語』①へ小学館、一九九四年三月)に拠る。

源氏の中將は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭中將、容貌用意人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。入り方の日陰さやかにさしたるに、葉の声まさり、もののおもしろきほどに、同じ舞の足踏面持、世に見えぬさまなり。

(中略)

木高き紅葉の蔭に、四十人の垣代いひ知らず吹きたてたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山のおろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散りかふ木の葉の中より、青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散りすきて、顔のにほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて

左大将さしかへたまふ。

『源氏物語』①紅葉賀 三二一～三二五頁

この『源氏物語』の記述と『右京大夫集』の記述との類似、関連に着眼した考察としては、谷山茂「二つの美意識——新古今集と平家物語——」(『国文学 解釈と教材の研究』第一五巻第一三〇号、一九七〇年一〇月。谷山茂著作集6『平家の歌人たち』(角川書店、一九八四年一月)に再録)、糸賀きみ江「平家文化」(久保田淳編、講座日本文学『平家物語下』(至文堂、一九七八年三月)所収)、久保田淳「平家文化の中の『源氏物語』——『安元御賀記』と『高倉院升遐記』——」(『文学』第五〇巻第七号、一九八二年七月。久保田淳『藤原定家とその時代』(岩波書店、一九九四年一月)に再録)、三田村雅子「記憶の中の源氏物語」(8)安元御賀の「花の姿」(『新潮』第一〇二巻第二号、二〇〇五年二月。三田村雅子「記憶の中の源氏物語」(新潮社、二〇〇八年一月)に再録)、櫻井陽子『建礼門院右京大夫集』から『平家物語』へ」(『中世文学』第五五号、二〇一〇年六月。櫻井陽子『平家物語』本文考』(汲古書院、二〇一三年二月)に再録)、久保貴子『建礼門院右京大夫集』の『源氏積』『源氏物語』引用——表現の基底にあるもの」(『実践国文学』第八〇号、二〇一一年一〇月)等がある。

(11) 青海波を舞う維盛に対する右京大夫の憧れの眼差しについて詳しく論じた先行研究として、注(10)に挙げた、櫻井陽子

『建礼門院右京大夫集』から『平家物語』へ』がある。櫻井氏は定家本系『安元御賀記』や『たまきはる』における安元御賀の記述と『右京大夫集』の維盛の青海波の記述とを比較し、「それらに比べると、右京大夫の維盛に対する眼差しは異なっている。維盛の青海波の舞、というよりも維盛の美貌への注視は、当時の人々の共通の関心というよりも、寧ろ右京大夫という、維盛に非常に近い女性の視線から捉えた個人的な営為であり、しかも鮮烈な記憶を形作った時間であったと捉えられる」と指摘している。櫻井氏自身もこの指摘に続けて、「勿論、その美しさを人々が語ったとあるように、感慨を抱いた人は右京大夫一人ではなかったらう」と述べているように、右京大夫の維盛への注視のあり方がどの程度「個人的な」ものであったかは定めがたいところであるが、櫻井氏の指摘は『右京大夫集』の記述の特質を考える上で重要である。

(東北大学大学院文学研究科前期課程在籍)